豊かな感性を育む音楽づくりの指導

―― 複式中学年(3，4年生)音楽物語をつくろう「つるのおん返し」の実践を通して ――

真　田　美智子

1．豊かな感性を育む音楽科授業

豊かな感性を育む音楽科授業にとって必要なものは何か。第一に，気づき，感じ，表現するのは児童であるということの再認識である。ともすれば，児童に美しさを感じとらせようとしすぎるあまり，教師の感じ方を押し付けてしまうことがある。教師の感じ方を素直に表現することも大切であるが，児童の感じ方や表現を無視したりすることのないようにしたい。教材や活動のために児童がいるのではなく，児童のために教材や活動が用意されるべきである。第二に，その児童の感じ方や表現を大切にしながら，さらに感じ方や表現を深めたり高めたりずる手だてを講じることである。指導者は，一人一人の子どものよさを見いだし，支えていく役割を担っている。指導者のことばかけ，次の指導への方向付け，児童の実態把握を充実させて，より高めていくための手だてを講じる。

ここでは，指導事例－音楽物語をつくろう「つるのおん返し」を通して，豊かな感性を育む授業に迫りたい。

2．指導事例－音楽物語をつくろう「つるのおん返し」(複式中学年3，4年生)

(1) 題材について

本題材は,「つるのおん返し」のお話をもとに，場面に合う音をつくって，音楽物語づくりの楽しさを味わわせることをねらいとして構成している。教材曲としては,「つるのおん返し」(平井多美子作詞　橋本祥路作曲）を中心にしながら，ナレーションやセリフ，場面の音を工夫していきたい。この楽曲の歌詞は，この昔話の大筋をまとめながら，物語全体の流れをとらえている。旋律もイ音を基調とした旋律でまとめられており，日本の民話の雰囲気とよく合っている。

「つるのおん返し」は，児童もよく知っている話であり，場面を想像したり，イメージを持ったりすることができやすいと思われる。また，雪やつるの羽音，風の音などの場面の音を想像して，それに合う感じの音を探したり工夫したりして表現することは本学級の児童にとって魅力のあることであろう。

本学級の児童は，3年生10名（男子5名，女子5名）4年生10名（男子5名，女子5名）の合計20名の学級である。これまでに身の回りのものを打ったりこすったりして音を鳴らしたり，曲に合わせて好きな楽器でリズム打ちをしたりする経験を持っている。また，音楽室の中の楽器にも興味を示し，楽器探検の活動をしたこともある。表現するための技能は個人差があり，学年による大きな違いはあまりみられない。学級集団としてみたときも，安心して表現し合える雰囲気があり，互いのよさをみつめあおうとする意識が高まってきている。

指導にあたっては，グループ活動を取り入れ，場面に合ったナレーションやせりふ，音や音楽をつくる楽しさを味わわせたい。場面に合う音づくりにおける音素材は，これまで鳴らしたことのある音の中から探したり選んだりするであろうと思われる。これまでの経験や友達の表現を見たり聞いたりする中で，自分でふさわしい音を選択させていきたい。また，自分でいいと思った音は積極的に模倣させたい。

豊かな感性を育む授業であったかについては，次の指導目標を学習過程においてどのように具現化し，達成することができたか，子どもの表現の状況や発表，感想などから分析し，考察したい。

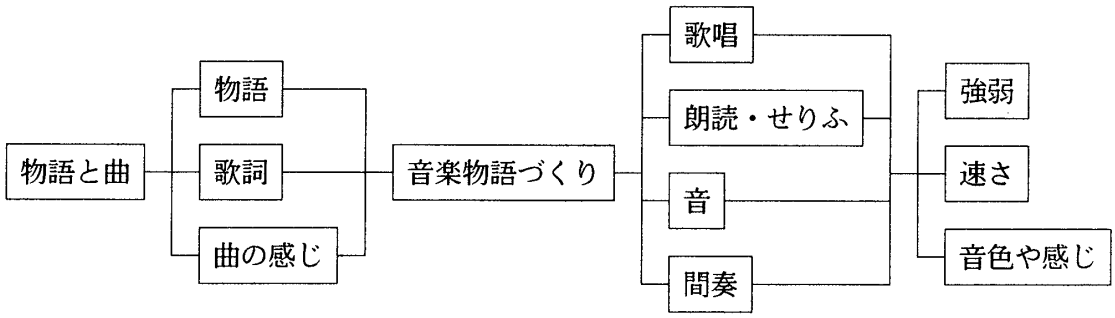
(2) 指導目標

① 物語の場面を想像して，イメージに合った歌い方や音づくりをする楽しさを味わわせる。

② イメージを出し合って，自分なりの表現をすることができるようにさせる。

③ 互いのよさを認め合って，よりよい表現にしようとする態度を育てる。

(3) 指導内容と計画 …… 7時間



(4) 指導の流れ

	ねらい	主な学習活動	支援・指導上の留意点
第一次②	曲や物語の感じをつかんで，歌ったり演奏したりさせる。（2時間）	○「つるのおん返し」の曲を聞く。 ○「つるのおん返し」を歌う。 ○曲の感じや物語について話し合う。 ○間奏をリコーダーで演奏する。	・「つるのおん返し」について知っていることを話し合って意欲化を図る。 ・「そっと消えます空のはて」と消えていったつるの気持ちやその時の男の気持ちを考えさせて，歌い方に気づかせていく。
第二次⑤	イメージを出し合い，音楽物語づくりへの意欲付けをする。（2時間）	○場面ごとの気持ちや音を想像して，音探しをする。 ○場面ごとのグループ作りをする。	・朗読やせりふを加えた音楽物語を提示する。 ・場面ごとに聞こえてきそうな音について話し合い，音を探す場を設定する。
	音や朗読，歌い方を工夫して，音楽物語をつくる楽しさを味わわせる。（3時間）	○グループごとに，場面に合った音を探す。 ○グループごとに探したり，工夫した音を聴き合って音あてをする。 ○朗読に合わせて，音を出したり，歌ったりする。 ○音や朗読，歌い方を工夫して表現する。	・めあてをもった音探しや音の工夫ができるように，話し合いや音探しの時間を十分とる。

資料－表①

つるのおん返し

ろう読・歌・間奏	聞こえてきそうな音
―第一場面― (朗読) 雪がふり続いたある日、一羽のつるがわなにかかって苦しんでいました。 「かわいそうに。よしよし、いたくても、少しがまんしろよ。」 わかものが矢を引きぬくと、つるは空高くまいあがりました。 (歌　一番)　むかしまずしい村の人 つるを助けてあげました はねを広げてなくつるは 遠くの山へと消えました (間そう)	雪がふる音 悲しそうな感じ つるが苦しんでいる声 もがいている羽音 矢をひきぬく つるがいたくて鳴く声 空高くまいあがる
―第二場面― (朗読) その夜のことです。 戸をたたく音がするので、あけてみると一人のむすめが立っていました。 「わたしは、おまえさまのよめさまにしてほしいと思ってここへ来ました。どうか、ここへおいてください。」 (歌　二番)　やさしい人へのおん返し つるはむすめになりました はたをおりますトンカラリ 朝もはやから日くれまで (間そう)	夜の感じ 足音 戸をたたく音 戸をあける音 風が入ってくる
―第三場面― (朗読) むすめは、たいへんよくはたらきました。けれども、はたをおるすがたはだれにも見せませんでした。 わかものは、ふしぎでたまらなくなりました。 「のぞいてはならんと言われたが・・・」 わかものは、とうとうがまんしきれず、ついに戸をあけました。 そこにいたのは、あのつるでした。 「わたしは、いつか助けてもらったつるです。すがたを見られたからには、もうおそばにはいられません。どうか、お元気で・・・」 (歌　三番)　しあわせづいたある朝に つるははたおりのぞかれて そっと消えます空のはて むかしむかしの話です	はたおりの音 どうしようかと迷っている感じ 戸をあける音 びっくりした感じ 空のはてに消える羽音・鳴き声 さみしいような感じ

⑸ 音楽物語づくり

① 音づくりにあたって

P101の表の「ろう読，歌，間奏」の部分は，第一次の活動を受けて,「つるのよめさま」(文・松谷みよ子・講談社）をもとにして教師が提示したものである。

この話を読んだ後，場面ごとに聞こえてきそうな音を話し合った。表の下の「聞こえてきそうな音」は，子どもたちが考えたものを授業の中でまとめていったものである。

最初は，つるが痛くて鳴いている声や，飛んでいく羽音のように具体的な音が子どもたちから出された。「どんな音かな？」と問い返すと,「クークー」とのどを鳴らして音を出したり，腕をバタバタさせながら「バサバサ……」と表現したりした。「リコーダーでも出せそう。」「紙を振ったりしてもできそうだ。」などの意見が出た。

話し合っていくうちに，次のように音の順序や重なりに気づいて発表する児童が見られるようになった。

○「始めに，雪がふっている感じの音があって，それといっしょにつるがもがく音や鳴き声を出したらいいと思います。」

○「第３場面で，はたおりの音がずっと続いていて，わかものがどうしようかとうろうろする足音が聞こえてきて，戸を開けたと同時にピタッとはたおりの音がやんでしまう。」

さらに,「悲しい感じにしたい。」「夜の感じの音をいれたらいい。」「第３場面では，むすめがつるだとわかってびっくりする感じにしたい。」というように雰囲気や感じに注目する児童もいた。

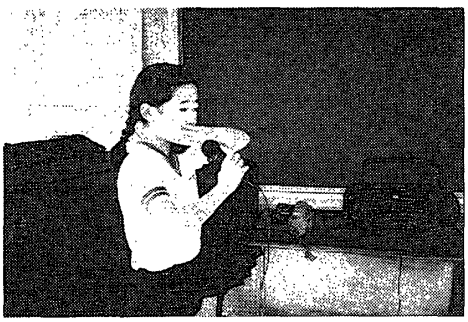
② 音楽物語づくり

朗読や音探し，音づくりは，第１場面７名，第２場面６名，第３場面７名の３つのグループにわかれて取り組むことにした。

グループによる音探しや音の工夫の場では，次の２点について子どもたちのようすを把握し，適宜助言することにした。

⑴ 意欲的に音探しをしているか。困っていることはないか。
⑵ 誰がどんな音をみつけているか。また，みつけようとしているか。

第１場面のグループは，雪が降っている音を鉄琴で表すことにしていた。サステインをきかせた方がいいか，サステインをしないでマレットをすべらす方がいいか，試していた。子どもたちどうしの話し合いで，両方使ってだんだん雪がふっているようすを表そうということになった。



第２場面のグループでは，息をふいて風の音を表現しようとしていたが，音が聞こえにくいので他の方法を考えていた。リコーダーの頭部管を使ったりして試していたが,「マイクを使ってみたい。」ということになり，マイクのセットをすることにした。試してみると，イメージと違っていたようである。しかし，口とマイクの間に手をおいて息のあたりを柔らかくすることで，イメージに近い音を出すことができたと喜んでいた。

第３場面のグループは，はたおりの音がよくわからないと困っていた。歌詞には「トンカラリ」と表現してあるが，実際に見たり，はたを織ったりする経験がない。教師自身も同様なので,「昔話を見たり，おうちの人に聞いてみたりしよう。」ということになった。

次の表は，音楽物語づくりで最終的に（第二次第３時）表現されたものをまとめたものである。

資料－表②

－第１場面－　朗読・・・<児童①>

雪がふる（鉄琴）
マレットでゆっくり
高い音をならす。
サステインをせず，
グリッサンドをくり
返す。（高いドからソ）
<児童②③>

↓

~~矢をひきぬく~~
グループで話し合ってこの音は
入れないことにした。

悲しい感じ（大太鼓）
静かにゆっくりと
打つ。
<児童④>

つるが苦しんで
いる声
（リコーダー）
クークーと
<児童⑤>

もがく羽音
（新聞紙）
<児童⑥>

↓

空高くまいあがる
（新聞紙）
ゆっくりふる。
だんだん小さく
<児童⑦>

－第２場面－　朗読・・・<児童⑧>

夜の感じ
静かで雪がふる。
（ツリーチャイム）
<児童⑨>

↓

（タンブリン）
<児童⑨>

↓

むすめの足音
（紙とビニール）
<児童⑫>
<児童　>
戸をたたく音
↓ <児童⑬>
戸をあける音
（移動式黒板）
<児童⑭>

風
（息とマイク）
<児童⑪>

↓

↓

－第３場面－　朗読・・・<児童　>

はたおりの音
（ギロ）
ギー　トン
<児童⑮>

↓

どうしようかと迷っている足音
（シンバル）

戸をあける音

おどろき
（大太鼓・ティンパニ）

空のはてに消える羽音
鳴き声　（さみしいような感じで）

3．考　察

(1)　物語の場面を想像して，イメージに合った歌い方や音づくりをする楽しさを味わわせることができたか。

音楽物語づくりへの抵抗感はほとんどみられず，無理なく活動に取り組んでいた。場面を３つにわけて聞こえてきそうな音をみんなで話し合ったこと，音楽室にある楽器で音を探したり，物語を読んだりしたことなどが理由として考えられる。また，朗読に合わせて音の表現や歌唱表現をした

ので，音を出すタイミングがとりやすく，音の重なりや互いの音のタイミングを合わせる楽しさを味わうことができた。

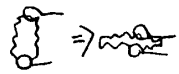
また，互いの表現を聴き合うときには，大変静かになり，小さな音にも耳を傾けていた。

(2) イメージを出し合って，自分なりの表現をすることができたか。

感想より

○私は，２場面の足音をやりました。まず，最初に新聞紙でやりました。足でふんだり，手でもんだりしました。もむと，音が出にくかったので，ぐるっとまわしてひねりました。その次は，うすい紙を図①のようにしました。そしたら，Mさんが「ひねるといいよ。」と言いました。最初は，「ささら」でやりました。ふつうに図②のように使うのではなく，図③のように使いました。ぎゅうぎゅうという音が出ました。(児童　４年)

図①



図②

図③

○３場面の空のはてに消える羽音をしました。どのくらいの新聞紙をどうやってふるかまよいました。最後だから，悲しそうにゆっくりとすることにしたので，１まい全部使ってゆっくりふることにしました。(児童　４年)

○あまり上手ではなかったけれど自分では満足している。もう１度やりたい。(児童⑮)

児童は，自分なりのイメージをもって足音を追求している。児童は，悲しそうな感じを出すために速さや素材の使い方を工夫している。また，実際に発表する時には使わなかったが，１つの素材からいろいろな音を出してみようとする姿がみられた。

児童がしっかりイメージを持っていること，音とのふれ合いや試行が充分できることが表現の追求のためには大切である。

(3) 互いのよさを認め合って，よりよい表現にしようとする態度を育てることができたか。

感想より

○Kさんは，ささらをひねったりして，いろいろな音を出してよかったです。１つの楽器でもいろいろな音が出せるんだなと思いました。(児童⑨　４年)

○Yくんのはたおりの音や，Kさんの足音，Nさんの雪のふる音，KOさんのなき声がとても合っていました。

○１場面のつるが空高くまいあがる音をしました。最初は新聞紙でのばしたりちぢめたりしていたければ，Oのおねえちゃんがのばしてゆらしていました。まねをしてみたらうまくできました。(児童　３年)

場面ごとの表現の場を設定し，工夫しているなと思ったところを互いに発表させるようにした。感想には表れていないが，「朗読の人が，間をあけてゆっくり読んでいるのがいいと思いました。」とか，「足音と戸をたたく音，戸を開ける音のタイミングがよく合っていた。」など，間のとり方やタイミングについてのよさに気づく児童もいた。

しかし，互いのよさを認め合ってよりよい表現をしようとする態度は，１つの題材だけではなく，今後も指導を積み重ねていくべき事項である。本題材においてみられた子供のよさを今後も継続して高めていきたい。